

## 書評「見る聞くわかる野鳥界（識別編・生態編）」

齋藤武馬（公益財団法人山階鳥類研究所）\*

「見る聞くわかる野鳥界 識別編 色と形、声としぐさでの見分け方」  
石塚 徹（著），山岸 哲（監修），水谷高英（イラスト），信濃毎日新聞社，  
2016年3月，164頁，本体価格2,160円，ISBN：978-4784072811

「見る聞くわかる野鳥界 生態編 生息環境とわけあり行動の進化」  
石塚 徹（著），山岸 哲（監修），信濃毎日新聞社，  
2016年6月，288頁，本体価格2,376円，ISBN：978-4784072859



まず本書を手にとって持った印象は、「変わった図鑑だな」という感想だった。まず、タイトルの「野鳥界」という言葉が新鮮だ。そんな単語、これまで私は聞いたことがない。帯をみると「ようこそ野鳥界へ」と書いてある。人間界ならぬ「野鳥界へようこそ」というわけだ。著者は、クロツグミの囀りの研究等で知られている石塚 徹さん、イラストは様々な図鑑ですでに定評がある水谷高英さん、監修者は言わずと知れた山岸 哲先生である。信濃毎日新聞社から発行されているように、長野県に縁のある方々が多く関わり、本書はできている。

本書の特色は、「識別編」と「生態編」の2冊に分かれている点がまず挙げられる。発行日を見ると、「識別編」が先に出て、「生態編」が後から出版されたのが分かる。別々に購入できるが、いわゆる二冊組みと言ってもよい本である。

では最初に、識別編から紹介していこう。「識別編」は表紙の文に「色や形、声としぐさでの見分け方」との説明がある。この「声としぐさでの見分け方」がポイントである。これまで、多くの伝統的なスタイルに則った、国内における鳥類図鑑は、羽色や大きさ、形態についての記述を重視しているものが多い。本書のように、しぐさ、つまり行動形質を重視している図鑑はこれまで皆無ではないが、少ないといえる。この「識別編」は、識別が主題であるにもかかわらず、行動についての記述も多く、後述する「生態編」の内容を少なからず含んでいる。実際、本の中のいくつかの箇所には「生態編 p○○」と、もう一冊の生態編と関連を記したマークも散見される。本書の構成をみてみよう。目次を見ると、「野山の鳥」、「水辺の鳥」、「見る機会の少ない鳥」として、棲息環境や観察頻度によって、

種を分けて解説している。さらにそれぞれの項目の中には、「スズメのような鳥」や「野山の猛禽類」など、似たような形と場所にいる種に分けてある。私のように分類順に種が表示されている図鑑に慣れてしまっている、古い？読者には、どこにその種が紹介されているのか、少々戸惑うかもしれない。

全体的には絵や写真が綺麗で、とても見やすくてよい。バードウォッチングの楽しみ方や用語の説明を紹介した「トリセツ」、珍しい瞬間の写真を紹介した「撮りルポ」などの小コーナーも楽しく見込めがある。ただ、いくつか気になる点もあった。一つのページに対して、少々情報量が多いために、本来紹介しなければいけないことが犠牲になっている箇所が見受けられた。例えば、ヤマドリの雄のイラストを見ると、長い尾が省スペース化を気にしたせいか、先まで描かれておらず、その鳥の一番の特徴が描かれていない。これでは、このような鳥だとおもってしまう初学者の読者もいるのではないかと。あと、鳴き声について、その特徴をカタカナで丁寧に説明してあるのはよいとおもうが、欲を言えば、タッチペン等を使って、声も聞けるような機能もあれば、完璧だったとおもう（欲を言すぎか？）。

次は、「生態編」である。こちらは、「識別編」と比べて、少々ページ数が多い。おそらく、これまで鳥類の行動生態学を得意としてきた、著者と監修者の力の入れ加減がそこに表れているのだろう。この「生態編」も「識別編」と同じ、種の区分で構成がなされており、統一感があって分かり易い。所々にみられる生態解説のコーナー「トリのキモチ」では、可愛らしくてユーモアたっぷりの挿絵が使われ、ある種についての特徴的な生態を紹介している。例えば、一夫多妻の度合いが極端に発達しているセッカのページでは、多くの雌を番う雄に対して、芸能レポーターが取り囲み、質問攻めになっている絵が描かれており、なかなか面白い。

この二冊を通していえることは、「識別」と「生態」が密接に関わっているということだ。つまり、姿形はその鳥の習性をも表しているものであり、その逆も然りなのである。最近では、デジタル機材の発達で後押しをして、野鳥の生態写真を撮るのが以前と比べて活発になってきている。それ自体はよいことであるとおもうが、良い写真（作品）を撮ることだけに夢中になってしまい、その鳥自体を「よく観ること」がおろそかになってしまっているという憂慮も近年よく聞く。姿形だけでなく、その鳥がどういう習性をしているのか、どんな動きをするのか、さらに、同種や他種の個体とどのような社会的な関わりをもっているのかについてまで、注意しながら鳥の観察を行えば、バードウォッチングはグッと楽しいものになる。本書は、そのことを言いたいのではないだろうか。

本書は、文献リストや索引が充実しているので、その文献から深く気になった箇所を勉強することもできる。そういう意味で、本書はバードウォッチングを始めたばかりの初心者だけでなく、ある程度鳥学について学んで来た読者も含めて幅広い読者層の要望に応える本であるとおもう。また、本書を購入する場合は、ぜひ、「識別編」と「生態編」を一对で2冊、まとめて購入して欲しい。先ほど、分類順に並んでいない図鑑を私は少々戸惑ってしまうと書いたが、このような先入観の無い、これからバードウォッチングを始めようとおもう読者には、この本を入門書として始めるのもアリなのかもしれない。本書を手取る事をきっかけとして、ぜひ「野鳥界」に入り込んでみてはいかがだろうか？